

Title	The Greville Memoirsとその作者について
Sub Title	The Greville Memoirs and its author
Author	海保, 真夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.289(24)- 306(7)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0306

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Greville Memoirs とその 作者について

海 保 眞 夫

[1]

The Greville Memoirs は、十九世紀前半におけるイギリスの政界、官界、社交界の内情を伝える貴重な資料であるが、日本の読者に馴染みのある作品とは言い難い。それだけに、星享の蔵書にこの書物を発見したとき、主として黒幕的行動のゆえに記憶されているこの明治の政治家を、別の目で眺めたい気がした。同じ蔵書のなかに、ヴィクトリア朝時代の政治家の伝記がかなり含まれていることを思えば、星の興味が奈辺にあったか察することができる。だが、こうした少数の場合を除けば、*The Greville Memoirs* が日本の読者の関心を惹いた例は、ほとんど皆無とみなしてよいようである。かりに英文学研究者がその名を思い起こすことがあるとしても、それはこの作品にたいする直接の興味からというよりは、むしろ Lytton Strachey との関連においてではないだろうか。

Strachey は *Eminent Victorians* (1918) の発表によって、ヴィクトリア朝時代にたいする幻想の打破に大きな役割を果たした。今日この作品を読むとき、むしろその穏当な内容にかえて驚くほどであるが、いずれにせよ、発表当時、この書に寄せられた凄まじい悪評は、作者をして偶像破壊者の先頭に立たせたのである。しかしながら、ヴィクトリア朝時代にたいする Strachey の内なる思いは、愛憎相半ばするものがあったと言ってよいだろう。彼は、いわば悪女の深情けにも似た執念をもってこの時代を追求し、*The Creevey Papers* (1903) や *The Greville Memoirs* が、その道案内を勤めたのである。1919年、Strachey は Clive Bell への手紙のな

かで、「*The Creevey Papers* の面白さにくらべれば、小説など物の数ではありません」と述べて、その熱中ぶりを披露しているが⁽¹⁾、事実、彼は面白い逸話を幾つかこの作品から拾い出して、*Queen Victoria* (1921) に利用した⁽²⁾。また、*Books and Characters* (1922) に収録されている一文は、Thomas Creevey に関する数少ない評論のひとつである。Creevey は、*The Dictionary of National Biography* にさえ記載されていない“知られざる人物”であって、日記と書簡を主体とする彼の文書は、いまだ完全な形では出版されていない。

しかし、*The Creevey Papers* 以上に Strachey の興味を惹き、彼の著作に大きな影響をおよぼしたのは、*The Greville Memoirs* である。Strachey の代表作は、言うまでもなく *Queen Victoria* であるが、*The Greville Memoirs* はこの作品の主要な典拠のひとつであった。*Queen Victoria* の緒言が示しているように、Strachey はこの伝記の執筆にあたって、Henry Reeve の編纂した *The Greville Memoirs* の刊行本はもちろんのこと、大英博物館の所有になるその原稿をも参照したのである。1919年、大英博物館の理事 H. A. L. Fisher にあてた手紙のなかで、Strachey は、原稿の未刊の部分の抜き書きを作りつつあることを報告したのち、「作者の Greville は、女王が一方の政党に味方をしたというので、ひどく腹を立てています。編者の Reeve が、女王の存命中は、それらの個所の公表を差し控えたのも無理はありません」と語っている⁽⁴⁾。

Queen Victoria が、いかに *The Greville Memoirs* に負うところが大きいかは、この伝記の前半部分の脚註に、後者が頻出しているのを見ても察せられよう。Victoria 女王の前半生を彩る歴史的な逸話の数々、たとえば、晩年の Melbourne が Milton の *Samson Agonistes* の詩句をつぶやく姿など⁽⁵⁾、その多くが *The Greville Memoirs* を典拠にしているのである⁽⁶⁾。それにしても、Strachey の資料利用の方法は、まことに巧妙であった。ある場合には、たとえば Windsor 宮殿の宴席で、国王が Kent 公夫人に向かって怒号する場面の記述のように⁽⁷⁾、彼は *The Greville Memoirs* の一節を巧みに換骨奪胎しており⁽⁸⁾、またある場合には、たとえば Wil-

liam 四世を“悪党三分の道化七分”と評した個所のように、Greville の文章をほとんどそのまま借用して⁽⁹⁾、しかもその出所を明らかにしていない。実を言えば、たとえば女王の夫君 Prince Albert の乗馬に関する記述⁽¹⁰⁾や、Albert が妻以外の女性に一度も心移さなかったことを述べた部分⁽¹¹⁾のように、Strachey が出所を示さずに *The Greville Memoirs* を借用した例は、*Queen Victoria* の随所に発見されるのである。

残念なことに、*The Greville Memoirs* は1860年以降の時代を扱っていない。このことは、*Queen Victoria* の構成にそのまま反映し、またおそらくは、その出来栄えにも影響を与えたと言ってよいかもしれない。Strachey 自身も、この事実を深く意識していた。彼は第七章の冒頭において、女王の後半生に関する資料の不足を嘆き、今後は単なる輪郭を描くに止めたいと語っている⁽¹²⁾。すなわち Strachey は、伝記の前半部分の記述にあたって、*The Greville Memoirs* の貢献がいかに大きかったかを暗に告白しているのである。疑いもなく優れた著作である *Queen Victoria* が、今後もお読者の興味を惹き続ける限り、*The Greville Memoirs* の寄与もまた、没却し難いことを指摘しておきたい。

Strachey と *The Greville Memoirs* の貸借関係は、一方的に前者の負債に終わったわけではない。既に記したように、彼は大英博物館に保管されている *The Greville Memoirs* の原稿を丁寧に検討し、その結果、刊行本には多くの省略が存在することを発見した。文学批評家として、Strachey は text の削除に常に強い憤りを示しており、なかでも、Horace Walpole の書簡の編集をめぐる、編者の Paget Toynbee と論戦を交した事実は有名である⁽¹³⁾。*The Greville Memoirs* の場合も、彼はしばしば機会をとらえては、無削除版の刊行がいかに必要であるかを主張し、ついにはみずからその編纂を引き受けている。これは、晩年の Strachey の主要な仕事のひとつとなったけれども、結局、彼の生前には完成せず、あとを引き継いだ Roger Fulford の努力によって、1938年、ようやく全8巻からなる決定版が誕生した。この間の経緯については、Fulford の序文と、Michael Holroyd の *Lytton Strachey* (1967) が詳細に伝えている⁽¹⁴⁾。

このように、*The Greville Memoirs* は作者の死後70余年を経て、はじめその全貌を明らかにしたのであるが、決定版の刊行以降といえども、作品の真価に関してなお多くの誤解が存在した。Kate O'Brien の短評が示しているように、⁽¹⁷⁾*The Greville Memoirs* を単なる“backstairs news”の寄せ集めとみなす評価は、依然として支配的なのである。以下において、Greville の生涯を簡単にたどったあと、誤解の生ずるにいたった事情を探ってみたいと思う。

[II]

The Greville Memoirs の作者 Charles Cavendish Fulke Greville の経歴は、イギリス貴族の cadet の歩む、いわば典型的な生き方のひとつを示している。Greville は、父方から言えば 第五代 Warwick 伯爵の曾孫であり、また、その母を通して、Portland と Devonshire の両公爵家とつながりを持っていた。しかし、彼自身は爵位の所有者ではなく、また財産にも恵まれていない。こうした境遇の青年は、門地を利用して官界に入るのが普通であるが、Greville もまた同様の道を選んでいる。いや選んだという表現は正確とは言えない。というのは、後年彼の占めることになる二つの官職は、母方の祖父で、George 三世の首相を二度勤めた第三代 Portland 公爵の斡旋により、既に彼の幼年のときから約束されていたからである。⁽¹⁸⁾

Greville は1794年に生まれ、Eton および Oxford に学んだあと、1821年、枢密院の常任書記官に就任し、1828年、ジャマイカ島の事務官を兼ねた。後者はいわゆる冗職のひとつで、彼は任地に赴くことなく、ただ俸給を懐に入れるだけであった。*The Creevey Papers* の記述によれば、Greville は国王の George 四世から、「よう Charles、ジャマイカの一件がやっと決まったぜ。枢密院をやめて、ひとつ出かけるかね」と聞かれて、「とんでもない」と答えたそうである。⁽¹⁹⁾1835年、冗職の廃止が議に上り、彼自身も議会の追求を受けたことは、*The Greville Memoirs* に記されているが、結局、彼はなんとかその地位を保持することに成功した。⁽²⁰⁾こ

れら二つの官職により、合わせて4000ポンド足らずの年収を得ていたと推定されている⁽²¹⁾。

浪費を日常茶飯事とする上流階級の子弟にとって、年に4000ポンドの収入は、もとより満足すべきものではなかったに違いない。しかし、この金額の意味するところを十分に認識するには、イギリス社会の別の方面にも目を向ける必要があるだろう。Dickens の *Christmas Carol* (1843) は、週給わずか15シリングで妻子を養う事務員を描いている。また、*The Greville Memoirs* にも、Manchester の工場地帯で働く女工たちの収入が、週に10シリングから14シリングに過ぎないことが記されている⁽²²⁾。これに比較すれば、Greville の立場がいかにか恵まれたものであったかは、断わるまでもないだろう。かくして彼は、目立たぬが居心地のよい官職に就き、波乱に乏しい生涯を送ることになる。最初に触れたように、それは、財産を持たない貴族の子弟が歩む、いわば典型的な生き方であった。そして、彼らの多くに倣って、Greville もまた生涯妻を娶っていない。

Greville は、1845年前後に、官を辞したい旨をしばしば日記に洩らしているけれども⁽²³⁾、結局、1859年まで枢密院書記官の地位に留まり⁽²⁴⁾、5年後の1865年に死んだ。生前、彼は *The Times* と緊密な関係を持ち、絶えずこれに情報を提供すると同時に、みづからも幾度か文章を寄せている。彼がいかにかこの有力紙とのつながりを重要視していたかは、*The Times* の主筆は全ヨーロッパを震撼させ得ると述べていることから理解できよう⁽²⁵⁾。*The Greville Memoirs* の最初の編者となる Henry Reeve と知り合ったのも、Reeve が *The Times* の主要な一員だったからである⁽²⁶⁾。Greville はまた、数種類の政治パンフレットを発表しており、なかでも、アイルランド政策を論じた *Past and Present Policy of England Towards Ireland* (1845) は、分量から見ても力作と称してよく、かなりの反響を呼んだ。しかしながら、公平に評して、Greville の文筆活動は特筆すべきものとはいえない。彼がもし *The Greville Memoirs* を残さなかったならば、おそらく彼の名は後世に記憶されることなく終ったに違いない。

Greville の生涯を述べるにあたって、逸することのできないのは彼と競

馬の関係である。競馬は、Greville が終生その魅力から脱し得なかった情熱の対象であり、彼がしばしば借金に迫られる原因をなした。競馬に浪費される時間と金銭とを嘆く言葉は、うんざりするほど *The Greville Memoirs* に発見されるのである。しかし、今ここでは、むしろイギリス貴族がどのような情熱を競馬に注いでいたのか、それを物語るひとつのエピソードを紹介するに止めよう。1860年、蔵相の Gladstone は、自己の財政案が上院で拒否されたことについて、首相の Palmerston に苦情を述べた。内心では廃案になったことを喜んでいた Palmerston は、次のように答えたとき Greville は記している。「そりゃあ君も口惜しいだろうさ。だけど俺の身にもなってくれよ。なにしろ絶対にダービーで優勝するだろうと期待していた俺の馬が、最後にへまをやりやがったんだ。それにくらべれば、君の口惜しさなんか問題にならんじゃないか」⁽²⁸⁾

[III]

The Greville Memoirs は、1874年から1887年にかけて、3部に分けて世に公表された。既に記したように、編者は Greville の友人 Henry Reeve であり、その序文には、原稿が彼の手許に保管されるにいたった事情が記されている。⁽²⁹⁾ Reeve は、作品の発表が惹き起こすかもしれない非難の声を予想して、物議をかもしそうな個所をまえて削除しておいた。しかしながら、世間の反響は、Reeve の予想をはるかに上廻っていたと言ってよいだろう。Fulford によれば、Lord Winchilsea は、*The Greville Memoirs* を“イスカリオテのユダの著わした使徒たちの伝記”と評したそうであるが、この作品に嫌悪を示した最も有名な読者は、言うまでもなく Victoria 女王である。女王は首相の Disraeli に書を寄せて、「Greville 氏の不謹慎、非礼、友人への忘恩、裏切り、君主にたいする恥ずべき不忠は歴然としています。それだけに、この書物は厳しく批判され、信用を失わしめるのが肝要でありましょう。王室を評するときの氏の口調は、歴史にその例を見ないものであり、言語道断と言わねばなりません」とその忿懣を洩らしている。⁽³⁰⁾ Reeve は、女王自身を批判した個所は、用心深く除い

ておいたのであるが、女王の伯父である George 四世や William 四世については、Greville の無遠慮な記述をそのまま発表した。過去の君主の放埒な振舞いを明らかにすることによって、現王室の尊厳が一層高められるというのが Reeve の言い分であったが、この見事な申し開きも、女王の不興を解くにいたらなかったようである。⁽⁸²⁾ 首相は女王への返書において、「この書物は、社会秩序にたいする不法行為だと私は考えております。さらに許し難いのは、作者も編者も、陛下にお仕えいたす官吏だという点であります」と答えている。⁽⁸³⁾

Disraeli は、*The Greville Memoirs* に度々登場していることでも判るように、Greville とは多少の交際があり、*Life of Lord George Bentinck* (1852) を執筆するさいに、*Memoirs* の一部を借用しているほどである。⁽⁸⁴⁾ しかし、Greville の死後における彼の発言は、必ずしも好意的なものとは言い難い。たとえば、Lady Chesterfield への手紙のなかで、彼は次のように述べている。「Greville は、人間に限らずあらゆる存在のなかで、最も虚栄心の強い男でした。私は Cicero も読みましたし、Lytton Bulwer とも親しい関係にありましたが、それでもなお、敢えてこのように申し上げるのです」。⁽⁸⁵⁾

出版当初におけるこうした反響は、*The Greville Memoirs* のその後の運命を二重の意味で不幸にした。すなわち、Greville を “chroniqueur scandaleux” と目する批評は、⁽⁸⁶⁾ 長年にわたって彼につきまとい、決定版の刊行を、実に彼の死後70余年も遅らせる結果となったのである。Michael Holroyd は、1927年においてもなお、Greville の縁者が原稿の全面公開にたいして、異議を申し出ることが懸念されていたと述べている。⁽⁸⁷⁾ それと同時に、*The Greville Memoirs* は、醜聞やゴシップを求める読者をも、十分には満足させ得なかった。Peter Quennell の指摘するように、1938年、決定版の刊行によって、原稿の未発表の部分が明らかにされたとき、むしろ読者は、その内容が人前をはばかりような性質のものではないことに、かえって驚きを感じたほどである。⁽⁸⁸⁾ この作品に、たとえば Brantôme の *Les Dames galantes* (1666) に類する内容を求めるのは、大きな誤り

と言わなければならない。

もちろん *The Greville Memoirs* は、醜聞の類をまったく含まないわけではない。たとえば、Norton 夫人の離婚訴訟に首相の Melbourne が共同被告として裁判所に呼び出された事件⁽⁸⁹⁾、あるいは、外相当時の Palmerston が、夜間、Windsor 官邸で、女官の部屋に闖入した事件⁽⁴⁰⁾など、この時代の名高い醜聞はひとつおき触れられており、また、Greville 自身の情事も、数回言及されている⁽⁴¹⁾。いわゆる徳というものを、男女の関係に限定して論じた場合、Greville の道徳観は自己の階級を越えるものではなかった。George 四世の官廷に青年期を過ごした彼が、イギリス貴族の放縱な生活に、さほど疑問を抱かなかったのも無理はない。謹厳な女王の夫君 Prince Albert を、“やかまし屋”と評する Greville の言葉のなかに、我々は摂政時代の cynicism を窺うことができるのである。

しかしながら、放埒な男女関係は、Greville にとって珍しいものではなかっただけに、彼は、それらが特に記述に値するとも考えなかった。実を言えば、この種の題材をどのように扱うかは、Greville 自身にも迷いが見られるのであって、ある場合には、「自分は宮廷のゴシップにはさほど関心がない」と述べ⁽⁴⁸⁾、またある場合には、「自分が醜聞を記録するのは、それによって、人間の性格や事件の発展が明らかになる場合に限られる」と記している⁽⁴⁴⁾。全体的に見て、George 四世と Willam 四世の治世を記録した前半の部分に、醜聞に類する記述が比較的多いと評してよいだろう。だが、我々は、「確かに醜聞や意外な事実も登場するけれども、その数はあまりにも少なく、あまりにも疎らである」という Strachey の言葉を思い出す必要がある⁽⁴⁵⁾。すなわち、*The Greville Memoirs* を醜聞の寄せ集めとみなした同時代の批評は、はなはだしく作品の真価を誤り伝えているのである。事実はむしろ逆であって、「Greville はゴシップや醜聞をあげつらうのを潔しとしなかったから、彼の *Memoirs* は、いささか薬味に乏しい感がある」と述べた Somerset Maugham の感想こそ、当を得たものと言わねばならない⁽⁴⁶⁾。

The Greville Memoirs が激しい批判の対象となったのは、ひとつには

作者の政治的立場にも原因がある。Henry Reeve は Greville について、「彼は自由主義を基盤とする保守的精神の所有者であり、党派心に囚われることがなかった」と評しているけれども、⁽⁴⁷⁾ *The Greville Memoirs* を一読すれば、彼の同情がウィッグ党にあることは、だれの目にも明らかであろう。だが、Reeve の折衷的説明にも理由があるのであって、それは、当時の複雑な勢力分布に端を発している。1841年、トーリー政府の出現を目前に控えたとき、Greville は、今後、トーリー党に対峙する野党勢力として、ウィッグ派、リベラル派、急進派、アイルランド自治派の4つを挙げている。⁽⁴⁸⁾ このなかで、ウィッグ派は当然その中心となるべき存在であったが、現実には、自己の *raison d'être* を失いかけていた。十八世紀以来、イギリスを支配してきたウィッグ派の大貴族たちは、急速な社会情勢の発展に直面して、かつてのように“進歩派”を標榜し得なくなったのである。彼らのなかには、たとえば Derby 伯爵のように、トーリー党に移る者もあり、また、Russell のように、左へ歩を進めて、リベラル派の指導者となる者も出現した。二人とも、*The Greville Memoirs* の主要な登場人物である。ウィッグ派を代表する Melbourne や Palmerston の場合も、変化を厭う点においては、トーリー党と何ら選ぶところがなかった。そして、Greville もまた、彼らと同様に、その思想傾向はきわめて保守的だったのである。

しかしながら、政治的信念は、必ずしも常に人間の行動を支配するわけではない。多年の伝統と個人的友誼とは、たとえば Melbourne の場合に顕著に見られるように、⁽⁴⁹⁾ しばしば信条の相違を越えて、ウィッグ貴族たちを互いに団結させた。それと同時に、これも多年にわたるトーリー党への敵意は、たとえ彼らと思想傾向を同じくしようとも、一朝にして消えるものではなかったのである。これは、Greville の場合にも当てはまるのであり、*The Greville Memoirs* のある個所には、トーリー党への露骨な敵意が窺われる。1852年、トーリー内閣が倒れたとき、Greville は、トーリー政権の続いていた間は、一度も枢密院会議に出席しなかったと述べ、「今後は、友人たちと一緒に、再び枢密院書記官の職務を果たしたい」と記し

ている。⁽⁵⁰⁾

Greville の親ウィッグ派としての言動は、もちろんトーリー党の注意を惹かずにはおかなかった。Fulford は、上院で Greville が攻撃されたとき、トーリー貴族が一斉に歓声をあげたと記している。⁽⁵¹⁾ 1875年、*Quarterly Review* が *The Greville Memoirs* を酷評したのも、この雑誌がトーリー系であることを思えば、容易にうなずけるであろう。匿名の評者は、この長文の書評を次のような言葉で結んでいる。「もしもこの種の回想録の助けがなければ現代史を執筆し得ないのだとすれば、むしろ現代史などない方がましである」。⁽⁵²⁾ こうした同時代の政治的偏見と党派心は、そうでなくとも数多く存在する *The Greville Memoirs* への誤解を、一層増大させた。Arthur Ponsonby は、Greville の記述の正確さに疑問の持たれたことを語っているが、⁽⁵³⁾ これは、この作品が蒙ったさまざまな不幸のなかで、作者の最も遺憾とする事柄であるに違いない。というのは、なるほど Greville の同情は明らかにウィッグ党に注がれているけれども、意図的に事実を曲げることは、彼の潔しとするところではなかったからである。Reeve が、Greville の主要な長所として、“真実を尊ぶ精神”を挙げているのは、⁽⁵⁴⁾ けっして友情から発した過褒ではない。

The Greville Memoirs の惹き起こしたさまざまな反響の原因について、最後に一言するならば、読者がこの作品に意外の感を抱いたことを否定し得ない。すなわち、いまだ存命中の多くの Greville の知人、あるいは関係者にとって、*The Greville Memoirs* の出版は、いわば不意打ちであったのだ。Greville は、作品においてこそ辛辣な人物批評を試みているけれども、現実の対人関係においては、いたずらに敵をつくることを極力避けようとした。Palmerston 夫人との口論と、その後の Greville の処置は、彼のそうした一面を遺憾なく物語っている。⁽⁵⁵⁾ Disraeli は、生前 Greville が“完全無欠の紳士”とみなされていたと記しているが、⁽⁵⁶⁾ それだけに、*The Greville Memoirs* の突然の出現は、読者にとって意外であり、許し難く思われたに違いない。前記の *Quarterly Review* の評者も、Greville がこのような作品を表わすとは夢想もしなかったと語っている。⁽⁵⁷⁾

[IV]

以上、*The Greville Memoirs* を巡るさまざまな誤解について、その原因と思われるものの幾つかに触れてきた。それでは、Greville はこの作品において何を意図したのだろうか。以下に、この問題に関する簡単な考察を行ない、もって結論としたいと思う。

The Greville Memoirs は、1814年から1860年、すなわち George 三世の晩年から Victoria 女王の治世にかけて、折に触れて書き留められた一種の日記である。しかし、一般に日記という言葉が読者に予想させるような、漫然と書き連ねたものの集積ではけっしてない。この点において、*The Greville Memoirs* と *The Creevey Papers* は、はっきり性質を異にすると言ってよいだろう。後者は、確かに珍重に値する情報を多量に蔵しているけれども、あくまでもそれは断片に過ぎず、しかも、現在の如き形で発表されることは、作者 Creevey の関知せざるところであった。これにたいして、Greville は明確な制作意図を抱いて筆を執っており、作品の内容も、完成した著作にふさわしい一貫性を備えている。彼が将来の公刊を期待していたことは、生前、幾人かの知人に草稿を示して、評を請うていたことから察せられよう。既に記したように、Disraeli は日記の一部を借覧しているが、彼以外に、たとえば Lansdowne も、草稿を見せられた一人であった。⁽⁶⁸⁾ また、記述の内容は、必しも一日の事件に限定されてはいない。1854年8月14日の項に見られるように、⁽⁶⁹⁾ 数頁にわたって政治情勢を概観していることも、けっして珍しくないのである。このように、作者が常に執筆目的を意識し、日記らしからぬ種々の特徴を備えているところに、この作品が一般に *Memoirs* と称される原因がある。

もちろん、執筆期間が50年近くにおよんでいることを思えば、その間に、Greville の意図に変動の見られるのは当然であろう。あるいはむしろ、作者は日記のあるべき姿を常に摸索していたとみなしたほうが正確かもしれない。Evelyn や Pepys の日記を読み、また、Scott や Byron、⁽⁶²⁾ Fanny Burney らの日記を評しているのを見ても、この文学形式にたい

する彼の深い関心を窺うことができる。しかし、Greville は生涯摸索のままに終わったわけではない。*Edinburgh Review* の書評が指摘しているように、⁽⁶⁴⁾ *The Greville Memoirs* は、後半にいたって著しく政治回想録の性格を強めており、逆に、前半に頻出する社交界の逸話や私生活への言及は、次第に姿を潜めている。この現象が Greville 自身の自覚に発していることは、1838年1月2日の記述からも明らかであろう。⁽⁶⁵⁾ 「将来、自分の日記が人目にさらされることを思えば、他人の興味を惹くわけもない私個人に関する事柄など、とうてい記す気になれない」という彼の言葉は、実に、日記の後半部分の序文とみなしてよいのである。Greville は、政界の動向を日記の主題とすることに、ときとして不安を禁じ得なかったけれども、⁽⁶⁶⁾ 「日記の方法はさまざまであって、各自はその好みに従えばよい」と心に言い聞かせつつ、⁽⁶⁷⁾ みずから定めたその方針を最後まで守ったのであった。1660年11月13日、Greville は、これまでの自己の精進を不当に低く評価する言葉を記したのち、⁽⁶⁸⁾ 多年にわたる日記の筆を措いた。Greville のこうした謙遜は、もとより彼の真情を含んではいるけれども、同時に、その底には、日記文学にたいする彼の自負が潜んでいることを忘れてはならない。

The Greville Memoirs の作者が意図したのは、いわば同時代の政治史を提供することだった。この事実は、既に多くの評者によって指摘されており、Greville は、Clarendon, Gilbert Burnet, Horace Walpole, Nathaniel Wraxall など、著名な同時代史の作者たちとしばしば比較対照して論じられている。Clarendon が回想録を通して行なったことを、Greville は日記という形式を用いて試みていると Ponsonby が評したのも、⁽⁶⁹⁾ その一例である。もちろん、Clarendon がその生涯を過ごした清教徒革命時代に比較して、十九世紀の前半は、とうてい同様の興味を読者の心に掻き立てることはできない。しかし、*The Greville Memoirs* に扱われている約50年間は、必ずしも平穏無事の時代ではなかった。この半世紀の間に、実に3人の君主が相次いで王座にのぼり、15の内閣が交代し、選挙法の改正と穀物条例の廃止が実施され、対外的にはクリミア戦争を体験した。Greville の日記は、この間のイギリス政界の流れを、刻一刻と変化するその

動きのままに、しかもなおその全景を映し出しているのである。その意味で、*The Greville Memoirs* の真価は、作品全体を通して見るとき最も明瞭になるのであって、はなはだ抜粋に耐え難い著作と評してよいのである。

同時代史の作者として Greville を見た場合、ふたつの立場が彼の執筆態度を規定していることに気づくであろう。ひとつは、イギリス貴族の一員という階級的立場であり、今ひとつは、枢密院書記官という個人的立場である。貴族階級が、二十世紀においてもなお大きな勢力を有することを考えるとき、特に 1830 年代、すなわち選挙法の改正とそれに続く Chartism の盛んなりし時期に、いかに彼らが革命への恐怖におののいていたかは、今日の読者にはとうてい想像し得ないに違いない。しかし、彼らが痛切な危機感を抱いたのは紛れもない事実であって、Greville 自身も、トーリー党の首領 Derby が組閣すれば、aristocracy と democracy の対立は不可避であり、前者にとってははなはだ危険な事態が予想されると記している。⁽⁷⁰⁾

Joanna Richardson の指摘しているように、⁽⁷¹⁾ Greville は、産業革命とそれに伴う中産階級の進出が、相対的にイギリス貴族の後退をもたらしたことを深く意識していた。特に彼の場合、既に触れたように、冗職に関して国会の追求を受けるという個人的体験を通して、貴族の特権が昔日の如くでないことを、身をもって悟らされたのである。「当今、役人というのはまことに忌まわしい動物である。私の場合、ふたつの官職を兼務している以上、二重に忌まわしいのも当然なのだ」という自嘲の言葉は、⁽⁷²⁾ 新時代の到来に直面して、これに適応し得ぬまでも、せめて諦観をもって迎えようとする彼の態度を示している。もとより Greville は、こうした傾向を必ずしも座視していたわけではない。たとえば、選挙法の改正にさいして、トーリー党とウィッグ党の間を非公式に仲介しようと試みたのも、⁽⁷³⁾ 頽勢を食い止めんとする彼のはかない努力の表われであった。だが、当事者たる政治家たちは、Greville のこうした努力を多とするよりも、むしろ密かに失笑するのが常であり、⁽⁷⁴⁾ 彼自身もまた、おのれの行為の空しさを感じ

ていた。ある意味では、その挫折感が *The Greville Memoirs* の執筆へと彼を駆り立てたと言えるかもしれない。Greville の執筆態度は、超然として冷酷な診断を下す局外者のそれではなく、また、政界の内幕をのぞいて人の悪い笑いを浮かべる scandal monger のそれとも違っていった。乾いたその文体の背後に潜んでいるのは、激変する歴史の渦中において、その流れの行く末に深い関心を抱きながらも、しかもなお無力感に苛まれている一人の男の姿である。

枢密院書記官の地位は、Greville の無力感に一層拍車をかけたと言っ
てよいだろう。この官職は、門地のみを有して富に恵まれない青年にたいし
て、恰好の避難所を提供したけれども、それと同時に、彼を永遠に傍観者
の立場においた。⁽⁷⁶⁾ Reeve は、Greville には野心がなく、自己の社会的地
位に満足していたと語っているけれども、⁽⁷⁶⁾ *The Greville Memoirs* の与え
る印象は、必ずしも Reeve の証言を裏書きしない。Greville は、母方の
従弟の George Bentinck を評して、彼がもし政治に専念していれば、必
ず一流の政治家になっていただろうと記しているが、そのときの彼の心に
去来しているのは、明らかに自分自身についての感懐である。⁽⁷⁷⁾ 所を得ずし
て、空しく一生を浪費したという思いは、前述の無力感と重なりあって、
Greville の心境を一層苦いものにした。*The Greville Memoirs* の基調を
なす一種の諦観は、作者のこうした心境に由来するのである。

Bibliography

I. Works by C.C.F. Greville:

Past and Present Policy of England Towards Ireland. 2nd. ed.,
London, 1845.

The Greville Memoirs, ed. Henry Reeve. 8vols. London, 1888.

The Greville Memoirs, 1814-1860, ed. L. Strachey and R. Fulford.
8vols. London, 1938.

The Greville Memoirs, ed. Roger Fulford. New York, 1963.

II. Some Critical Studies:

"A Journal of the Reigns of King George IV. and King William

- IV.” Anon. rev., *Edinburgh Review*, CXL (1874), 154-186.
- “The Greville Memoirs”. Anon. rev., *Quarterly Review*, CXXXVIII (1875), 1-57.
- “The Greville Memoirs (Second Part)”. Anon. rev., *Edinburgh Review*, CLXII (1885), 495-535.
- [Thursfield, J. T.]. “Notes on the Greville Memoirs” *English Historical Review*, I (1886), 105-137.
- “The Greville Memoirs (Third Part)”. Anon. rev., *Edinburgh Review*, CLXV (1887), 182-214.
- Gladstone, W. E. “The History of 1852-60, and Greville’s latest Journals”, *English Historical Review*, II (1887), 281-302.
- “Diarists of the Last Century”. Anon. rev., *Quarterly Review*, CXCVII (1903), 186-207.
- Ponsonby, Arthur. “Charles Greville”, *English Diaries*. (London, 1923), pp. 272-279.
- Quennell, Peter. “Charles Greville”, *The Singular Preference*. (London, 1952), pp. 79-86.
- Richardson, Joanna. *Creevey and Greville*. London, 1967.
- * 参照し得たもののみを記した。

註

- (1) Michael Holroyd, *Lytton Strachey: A Biography* (London: Penguin Books, 1971), p. 753. 以下, Holroyd と略す。
- (2) *The Creevey Papers*, ed. Sir Herbert Maxwell, 2nd ed. (London, 1904), I, 261-271; 282-284.
- (3) Lytton Strachey, “Thomas Creevey” *Books and Characters* (New York, 1922), pp. 311-319.
- (4) Holroyd, p. 785.
- (5) Lytton Strachey, *Queen Victoria* (London: Poenix Library, 1929), p. 122. 以下, Strachey と略す。
- (6) *The Greville Memoirs, 1814-1860*, ed. L. Strachey and R. Fulford (London, 1938), VI, 136. 以下, S & F, *Greville* と略す。
- (7) Strachey, p. 38.
- (8) S & F, *Greville*, III, 308-310.
- (9) Strachey, p. 34.

- (10) S & F, *Greville*, III, 375.
- (11) Strachey, p. 130; S & F, *Greville*, V, 148.
- (12) Strachey, pp. 113-114; S & F, *Greville*, VI, 10-11.
- (13) Strachey, p. 190.
- (14) Holroyd, pp. 996-998.
- (15) S & F, *Greville*, I, vii-xi.
- (16) Holroyd, pp. 998-1005.
- (17) Kate O'Brien, *English Diaries and Journals* (London, 1943), p. 37.
- (18) S & F, *Greville*, I, xiv.
- (19) *The Creevey Papers*, ed. John Gore (London, 1937), p. 267.
- (20) S & F, *Greville*, III, 226-227.
- (21) *The Greville Memoirs*, ed. Roger Fulford (New York, 1963), p. xii.
- (22) S & F, *Greville*, V, 239.
- (23) S & F, *Greville*, V, 236; 325; 355.
- (24) S & F, *Greville*, VII, 417.
- (25) S & F, *Greville*, V, 345.
- (26) S & F, *Greville*, IV, 476.
- (27) S & F, *Greville*, V, 211-212.
- (28) S & F, *Greville*, VII, 478.
- (29) *The Greville Memoirs*, ed. Henry Reeve (London, 1888), I, xi-xii. 以下, Reeve, *Greville* と略す。
- (30) S & F, *Greville*, I, viii.
- (31) W. F. Monypenny and G. E. Buckle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*, new and revised edition (London, 1929) II, 690. 以下, M & B, *Disraeli* と略す。
- (32) Elizabeth Longford, *Queen Victoria: Born to Succeed* (New York: Pyramid Edition, 1966), p.399.
- (33) M & B, *Disraeli*, II, 690.
- (34) S & F, *Greville*, VI, 314; M & B, *Disraeli*, II, 688.
- (35) *The Letters of Disraeli to Lady Bradford and Lady Chesterfield*, ed. Marquis of Zetland (London, 1929), I, 163. 以下, *The Letters of Disraeli* と略す。
- (36) S & F, *Greville*, I, viii.
- (37) Holroyd, p. 1001.
- (38) Peter Quennell, "Charles Greville", *The Singular Preference* (London, 1952), p. 82.
- (39) S & F, *Greville*, III, 290-293.

- (40) S & F, *Greville*, VI, 441.
- (41) S & F, *Greville*, I, 124; 148.
- (42) S & F, *Greville*, IV, 413.
- (43) S & F, *Greville*, I, 150.
- (44) S & F, *Greville*, II, 10.
- (45) Holroyd, p. 1004.
- (46) William Somerset Maugham, *Points of View* (London, 1958), p. 190.
- (47) Reeve, *Greville*, I, xiv.
- (48) S & F, *Greville*, IV, 399.
- (49) David Cecil, *Melbourne* (London: Pan Books, 1969), p. 360.
- (50) S & F, *Greville*, VI, 388.
- (51) Roger Fulford, *The Prince Consort* (London, 1949), p. 160.
- (52) "The Greville Memoirs" (anon. rev.) *Quarterly Review*, CXXXVIII (1875), 57. 以下, *Quarterly Review* (1875) と略す。
- (53) Arthur Ponsonby, "Charles Greville", *English Diaries* (London, 1923) p. 279. 以下, Ponsonby と略す。
- (54) Reeve, *Greville*, I, xiv.
- (55) S & F, *Greville*, V, 144.
- (56) *The Letters of Disraeli*, I, 163.
- (57) *Quarterly Review* (1875), 7-8.
- (58) S & F, *Greville*, VI, 131.
- (59) S & F, *Greville*, VII, 49-57.
- (60) S & F, *Greville*, I, 327.
- (61) S & F, *Greville*, V, 59.
- (62) S & F, *Greville*, IV, 1-2.
- (63) S & F, *Greville*, V, 58-59.
- (64) "The Greville Memoirs (Second Part)" (anon. rev.) *Edinburgh Review*, CLXII (1885), 496.
- (65) S & F, *Greville*, IV, 1.
- (66) S & F, *Greville*, V, 58.
- (67) S & F, *Greville*, V, 59.
- (68) S & F, *Greville*, VII, 483.
- (69) Ponsonby, p. 273.
- (70) S & F, *Greville*, VI, 172.
- (71) Joanna Richardson, *Creevey and Greville* (London, 1967), pp. 24-25.
- (72) S & F, *Greville*, III, 222.
- (73) S & F, *Greville*, II, 234-247; 249-270; 274-278; 280-295.

- (74) [J. T. Thursfield], "Notes on the Greville Memoirs", *English Historical Review*, I (1886), 111.
- (75) "A Journal of the Reigns of King George IV. and King William IV". (anon. rev.) *Edinburgh Review*, CXL (1874), 517. 枢密院書記官は政治に
関与し得ないことになっていたので、1859年、トーリー党の領袖たちが、党
内右派の Robert Cecil の行動を封ずるため、彼を Greville の後任に据え
ようと画したことがある。M & B, *Disraeli*, I, 1583.
- (76) Reeve, *Greville*, I, xiv.
- (77) S & F, *Greville*, V, 303.